

# プロット『藤白くんのヘビーな恋（仮）』

神戸遥真作

#2023年カレンダー

#入学式 4/7（金）、部活動の仮入部 4/17～、GW 4/29（土）～5/7（日）

## ◆プロローグ

絵本のなかの物語や少女マンガにでてくるような王子さまがあらわれたらいいのになって、夢見たことがある。わたしだけのことを「好き」って言ってくれる、そんな王子さまがいたらいいのになって。

——だけど。

「かわいい。」「結婚して。」「琴子がいればいい。」「好き。」

そんな風に毎日毎時間言われるようなの、想像してなかったし！

藤白くんと「仲よくする」って言ったのはわたしだけ。もう、どうしたらいいのかわかりません……！

## ◆1. 琴子と仲よくしに来た

#4/14（金）

中学生になって一週間。近所のマンションをおとすれたわたしは、何度も部屋番号を確認してからインターフォンを押した。「桜木南中学校の、椿森といいます。

藤白佑真くん、いらっしゃいますか？」

\*\*\*

わたしは昔から頼まれるとことわれない性格。中学でも友だちの推薦でクラス委員になってしまった。

でも、今日はそれが役立った！

帰りのホームルームがおわったあと。教室のうしろのほうに立っていた副担任の水島先生が、大きなため息をついたのをわたしは見逃さなかった。ドキドキしながら近づいて、「悩みごとですか？」なんて聞いてみると苦笑された。「椿森さんは、そういうの、よく気づくよね。」

水島先生だから——康平くんだから気づくんだけどね。

康平くんはうちの近所に住んでいて、幼稚園児のころから知ってる。遊んでもらったことも勉強を教えてもらったことも何度もあって、やさしくてカッコよくて、わたしは内心ずっとあこがれてた。そんな康平くんが先生になって、副担任になるなんてホントにびっくり！

学校では「康平くん」じゃなくて「水島先生」って呼ぶっていうのも、春休みに会ったときに決めたこと。よそよそしいけど、なんか二人だけのヒミツ、みたいな感じでドキドキする。

「じつは」と水島先生はこっそり話してくれた。入学式以来、ずっと休んでいるク

クラスメイトの藤白くんの家に毎日行っているんだけど、家の人にもまったく会えてないのだそう。

「今日は職員会議があるから行けないんだけど、どうしたらいいか悩んでて……」  
とのこと。それなら！ と名乗り出た。「今日はわたしが行ってみる！ クラスメイトなら、もしかしたら会ってくれるかもだし！」

\*\*\*

かくして、教えてもらったマンションに来てみたのだった。『佑真のクラスメイト？ 入って入って！』

インターフォンから聞こえた声は予想外にフレンドリー。先生はインターフォンの応答すらなかったって言ってたのに拍子抜け。最上階、十二階の部屋に通された。

でてきたのは、金髪にレインボーカラーのパーカーとだぼっとしたパンツスタイルの女の人。お母さん、にしては若いその人は、藤白くんの叔母でリリコさんだそう。「ごめんね、こんな格好で。もしかして、今週何回か来てくれてた？ ポストにプリントが入ってるの気づいてたんだけど、あだし寝ててさ。」

そしてリビングに通され待つこと数分。奥の部屋からドタバタと音がしたあと、リリコさんが男の子をひきずるようにつれてきた。「せっかくクラスメイトが来るんだから、あいさつくらいしな！」

そうして対面した藤白くんは、長い髪で目もとをかくし、いかにも渋々って感じ

で座った。

気まずい、けどせっかく会えたんだからと、わたしはプリントなどをテーブルにだしていった。

「用ってそれだけ？」「その……藤白くんは、なんで学校、来ないの？」

「勉強は一人でできるし、学校に行く意味がわからない。説得でもしろって先生に頼まれたの？」

頼まれたわけじゃないけど、先生のために来たのでちょっと凶星。だけど。

「同じクラスなのに、学校に来ない人がいるの、気になってたから。」「友だちでもないのに？」

水島先生情報によると、藤白くんは春にここにひっこしてきたばかり。友だちがいないってことなら！

「わたしが友だちになる！ それで、みんなにも紹介するよ。そしたら、友だちもたくさんできるよね！」

少しきょとんとしたような間があって、じっと見られた。お節介だって思われたかな……。

でも、藤白くんは聞いてきた。「それ、おれと仲よくするってこと？」「もちろん！」

そのときだった。藤白くんの表情がゆるんだ。前髪が流れて、思いがけず整った目鼻が見える。怖い人かと思ったけど、そうでもないのかも。

「髪、少し切ってみたら……？ そのほうが、顔が見えて、いいかも。」

「おれの顔、見えたほうがいい？」と聞かれてうなずいた。「そっか……」と言う藤白くんは、最初とはちがって急に態度がやわらかくなった。気をゆるしてくれたのかも。

「名前、何？」「わたし？ 椿森琴子。」「琴子……かわいい。」

名前のことだろうけど、同じ年の男の子に「かわいい」なんて言われたことはあんまりなくて、ちょっとドキンとしてしまった。

時計を見たらもうすぐ五時。弟たちが学童から帰ってくる時間だ。

「また学校でね！ 約束だよ！」と伝えると、藤白くんは「わかった」ってはいかむように笑んだ。ちゃんと笑えるんだ。

マンションのエレベータのなかで、水島先生に《藤白くんに会えました！》ってメッセージを送った。

☆☆☆

#4/17 (月)

週が明けて月曜日。昇降口で水島先生に会ってあらためてお礼を言われてにっこり。役に立ててよかった！ これで藤白くんが学校に来てくれればいいんだけど…  
…。

そうして教室について少しすると。ふいに、教室がざわっとした。

入口に、すらっとした見知らぬ男子生徒が立っている。先輩？ でも、上ばきの

色は一年生。すごい美形……と、思いました。髪がさっぱりしててすぐにわからなかったけど、藤白くんだ！

藤白くんは少しキョロキョロして、わたしを見つけるなり、その表情をゆるめた。そしてまっすぐにわたしのところに来ると、おもむろに手を取って。

手の甲に、まるで王子さまみたいに軽く唇を寄せてキスしてきた！

口をパクパクさせてるわたしに、藤白くんはにっこり。「約束どおり、琴子と仲よくしに来た。」

## ◆2. 藤白くんの愛が重たい

頬づえをついてこっちを見る藤白くんは、まつげの長いその目に照れたような笑みを浮かべた。目鼻立ちの整った顔はすごくきれいで、どこかの王子さまとかアイドルみたい。こんな状況じゃなかったら、素直にカッコいいって思ったたかもしれない、けど！

一時間目、数学。となりからの視線にたえきれなくて、つい横を見てしまったことを後悔した。

藤白くん、ずっとこっち見てる……。

教室にあらわれるなりわたしの手にキスをした藤白くんは、自分の机を見つけると、強引にわたしのとなりだった男子と席を交換してしまった。席がえはままだし、教室の騒ぎを聞きつけた水島先生がとめようとしたけど、「琴子のとなりじゃないなら帰る」と言いだして、結局そのままになったのだった。

黒板のほうに目をもどしても、やっぱり視線を感じる。しょうがないので、メモ帳に『授業に集中してください』って書いてまわした。すると、ノートを定規で切った紙に何かを書いてわたしてくる。

『手紙もらえてうれしい』 全然伝わってないしー！

『授業わからなくなっちゃうよ』『琴子の字すごくきれい』『見ないでください』『かわいい。好き』

ひー、とあってたら、二人して先生にさされてしまった。でも、藤白くんはわたしの分まですらすらこたえてしまう。「授業なんて聞かなくても平気。」 何を言っ

てもムダだと悟った。

そして、藤白くんはわたしが書いたメモ帳をていねいにクリアファイルにしまい、うれしそうにファイルの表面をなでた。余計なものを与えてしまった……。

二時間目、音楽。小学校から仲よしのサキが「音楽室行こ！」って来てくれた。そわそわしてこっちを見てる藤白くんに、サキが「藤白くんも一緒に行く？」と聞くとコクンとうなずく。やっぱりついて来るのかとげんなりだけど、そういえば藤白くんは学校案内の日に休んでたし、学校のこと知らないんだった。

「誰かに学校案内してもらおうように頼もうか？」「琴子にしてほしい。」

藤白くんと二人で学校案内とか怖すぎて、返事は保留にした。

音楽室ではパイプ椅子をだして各々好きなところに座ることになってて、藤白くんは当然のようにわたしのとなりをキープ。みんなからじろじろ見られちゃって、もう勘弁してほしい。

三時間目の社会は、となりからの視線はもうあきらめた。そして、四時間目は体育。

体育は男女別で、「女子は更衣室行くからついてこないでね！」と先まわりするように伝えて教室をでて、ようやく藤白くんからはなれられた。更衣室でサキに聞かれる。

「コトちゃん、藤白くんとは知りあいだったの？」



「まさか！ 先週、水島先生の代わりにプリントとどけに行って、そのときはじめて会ったんだよ！」

なのにこんな風にベタベタされてわけわかんない。『好き』って何!? 仲よくするとは言ったけど……！

すると、ほかのクラスメイトたちも話にまじってきた。

「でも藤白くん、カッコいいよね。」「前から知ってたんじゃないの?」「つきあってるのかと思っちゃった。」「椿森さんの彼氏がすごいイケメンだって、となりのクラスでも噂になってたよ。」

ちがうのにー！

そして体育がおわって教室にもどりがてら、水島先生に会った。「椿森さんと藤白くんがすごく仲いいって、職員室でも噂になってたよ。仲よくなってくれたのはよかったけど、まあ、ほどほどにね。」

噂が職員室にまで！ おまけにわたしが好きなのは水島先生なのに、大ショック……。

教室の入口では、そわそわした様子で藤白くんが待ってて、わたしを見るなりふやけるように笑った。

### ◆3. いそがしすぎる放課後

いろんな噂と誤解が広まっていくのをぼう然と見守ることしかできないまま、放

課後になった。すっかり忘れてたけど、今日から部活の見学・仮入部期間。廊下では先パイたちが一年生を勧誘しようとチラシを手にかまえていて、帰りのホームルームがおわって教室をでたクラスメイトたちがさっそくつかまってる。部活かぁ、と考えていたら、となりのクラスの歩がやって来た。

「部活の勧誘、ひっかかんなよ！ コトとサキはおれと一緒に同好会作るんだからな！」

わたしとサキと歩は、小学校時代に同じ英語塾に通っていた。塾は一年前になくなっちゃったけど、おかげでわたしたち三人は昔から親ぐるみで遊ぶことが多く、小六のときには中学で一緒に同好会を作ろうって約束してた。歩は動画配信者にすごくあこがれてて、動画を作る同好会を作りたいがってるのだ。

サキもやって来て、「同好会ってどうやって作るの？」と聞いた。歩は今日の放課後はそれを先生に聞きに行くんだという。「おれがばっちり調べとくから、明日は三人でうちあわせな！」

歩は用件を話すだけ話して去っていき、直後、藤白くんが舌うちした。「琴子になれなれしい……。」

うっかりしてた。せっかくなら、藤白くんに歩を紹介して、友だちになってもらえばよかった！

とにもかくにも、今日の放課後はまっすぐ家に帰れそう。用事があるからとサキに手をふって教室をでた。そして、当然のような顔をして、藤白くんもついてきた。

学校をでると、藤白くんは一步後ろからついてくる。背後霊みたい……。

「藤白くん、明日はちゃんと友だち、紹介するからね!」「しなくていい。琴子だけでいいし。」

それじゃ、わたしがこまります!

藤白くんのマンションの近くまで来た。わたしの家はこの少し先。家まで来られるのはビミョーだ。

大通りにさしかかったとき、わたしは点滅している歩行者信号を見てとっさに駆けだした。藤白くんも通りをわたろうとしたけど赤信号。「じゃあね!」とあいさつだけはして、そのまま走って帰宅した。

帰宅して手早く着がえると、家中に掃除機をかけてから洗濯ものをとりこんだ。それから冷蔵庫のなかを見て、牛乳がないことに気がつく。今日はシチューにしようと思っていたのに!

あわてて近くのスーパーに買いに行って、帰ってくると弟たちが帰宅してた。怪獣みたいな弟たちにひっつかれながら、手脚を洗わせて汚れたくつ下を洗濯機に放りこんでいく。それからご飯を炊飯器にセットして、箱を見ながらシチューを作っていく。

今まで、こういった家事は全部お父さんがやってくれてた。うちはお母さんが仕事で夜おそくなることが多くて、公務員のお父さんが早めに帰ってきて家事をするのがふつうだったのだ。

でも先月、お父さんが左うでを複雑骨折しちゃって、少し前には手術もして今も入院中。だから、お母さんとわたしで家事を分担してるんだけど……。

野菜を切ったら、弟たちがエプロンをひっぱってきた。学校で描いた絵を見せてきたり、あれこれと話しかけてきたりする。あとにしてって言っても、十分たたずにまたもどってくる。ようやく鍋に火をかけてリビングを見ると、洗濯ものがぐしゃぐしゃになっていた。子ども部屋からは何かをひっくり返した音と笑い声。もうすぐ午後七時。忙しすぎてもうぐったり。こんなんじゃ、同好会なんてできなそう……。

## ◆4. 彼氏じゃありません！

#4/18 (火)

そうして翌日の放課後。今日も今日とて藤白くんに辟易させられつつ、やっと放課後になった。給食当番でスープをよそったわたしに、「結婚して」って藤白くんが言ったのがここまでのハイライト……。

約束どおり、歩とサキと三人でうちあわせ。歩は同好会設立のために必要な書類を手に入れ、喜々として説明する。「問題なのは、会員が四人いないといけないってことなんだよな。」

それなら……と話しあいに勝手に参加している藤白くんにもみんなの目が行った。

歩には藤白くんと仲よくしてほしいって伝えたものの、藤白くんはその気はなさそう。歩もそんな藤白くんがおもしろくないみたいで、二人の空気はいきなり悪い。

とりあえず申請書類を作ることに。同好会の名前や活動内容、目的などを話しあっていく。

一方、わたしは時間が気になってた。もう四時半を過ぎてる。もうすぐ弟たちが帰ってきちゃう……。

「——コト、話聞ってるか？」 ふいに歩に声をかけられてハッとした。

「ごめん、ぼうっとしてた。」「まじめにやれよ。」「ごめん……あとあの、わたし、今日、用事あって。」

「は？ うちあわせするって約束だっただろ。」「そ、そうなんだけど……本当にごめん！」

サキが「用事あるならしかたないじゃん」とフォローしてくれるけど、歩をムツとさせてしまった。

謝りながら教室をでる。歩のことを怒らせたかもとおちこんでたら、藤白くんもついてきた。

昨日みたいについてきた藤白くんは、ちょっと不機嫌な顔でこんなことを言う。

「琴子は、なんであいつにつきあって同好会なんてやるの？ 琴子になれなれしいし怒りっほいし……。」

「歩とは、小学校のときから約束してたんだよ。ほかにやりたい部活もないし。」

「それなら、おれと何かやろう。」「二人じゃ同好会、作れないでしょ。……歩にも、事情があるんだよ。」

小六のとき、歩はサッカーの試合中に足をケガして、入院していた時期があるのだ。もともとすごく足が速かったのに前みたいに走れなくなっちゃって、おちこんでた歩が立ちなおるきっかけになったのが動画だった。『おれも神配信者になる』とか言ってすっかり元気になったときは、本当にホッとした。

「琴子は、あいつのこと好きなの？」「そんなんじゃないよ！ 歩は友だちだし。」

「ならよかった。」

藤白くんになっこりされちゃって、これはこれで反応にこまる。藤白くんは本当にわたしのこと好きなの？ まだ知りあって数日なのに……？

なんて、話しながら歩いていて気がついた。もうわたしの家は目と鼻の先。早く家に帰りたいけど、そしたら藤白くんの家を知られちゃう——と、思っていたら。

「ねーちゃん帰ってきた！」と、玄関のドアが開いて弟たちが駆けてきた。となりにいる藤白くん気づいて、弟たちは「キャー」と声をあげる。「彼氏だ！ ねーちゃんが彼氏つれてきた！」

おまけに、否定する間もなく藤白くんが「彼氏です」なんて自己紹介。弟たちは藤白くんをそのまま家のなかにひっぱりこんでしまった。サイアクだ……。

## ◆5. ずっと、がんばってた

「藤白くんに迷惑だから」って言ったけど、弟たちは大興奮。おまけに藤白くんも「琴子の家……！」なんて目をキラキラさせて、弟たちにしがみつかれてもまったく気にしてない。わたしの部屋には絶対に入らないようにとだけ伝えて、弟たちと藤白くんを放置することにした。

洗濯ものをとりこんで、炊飯器をセットして、カレーを作りはじめる。「琴子のご飯作るの？」と藤白くんが見に来たけど、すぐに弟たちにひっぱっていかれた。おかげで準備はいつもよりスムーズ。

野菜を切って炒めて煮こんで、そのあいだに洗濯ものをたたんでついでに掃除もして。

午後六時半にはカレーができて、弟たちと一緒に藤白くんも手をたたいた。弟たちは藤白くんにすっかりなついていて、「おもちゃを片づけろ」との命令もすなお

に聞いてて超助かる。

「なんかごめんね。でも、すごく助かったよ。」「疲れたけど、琴子が助かったならうれしい。」

藤白くんの家は、リリコさんの生活が不規則で家事は週に何度か来るハウスキーパーに頼んでいるんだという。ご飯も作りおきをたくさんしてもらって、自分で準備して食べるのだとか。なので、今日はうちでカレーを食べていってもらうことに。カレーを前に、また「結婚して」とか言ってくる藤白くんに、弟たちが「ぷろぽーず！」ってまたキャーッとした。

お手製カレーに大感激の藤白くんをますます手なづけてしまったようで内心複雑になっていたら、母がやっと帰ってきた。彼氏だとさわぐ弟たち。あわててクラスメイトだと紹介する。

「今日もいろいろやってくれてありがとー」とお母さんに頭をなでられてホッとした。お母さんは入院してるお父さんの様子も仕事の合間に見に行ってるし、いそがしい。わたしががんばるしかないよね……。

そうしてお母さんが自分のカレーをよそいながら聞いてくる。「琴子は、部活はどうするの？」

でも、すぐ返事できなかった。毎日こんなに忙しかったら、部活どころじゃない。

「琴子？」とお母さんは不思議そうな顔。でも大変なのはわたしだけじゃないし、わがままなんて言えないし……と、思っていたときだった。



「——琴子、今日、家に帰ってから、ずっと、がんばってた」と藤白くんが口をひらいた。

「同好会のうちあわせがあったけど、用事があるからって先に帰って。料理したり、掃除したり、いろいろやってた。リリコは家事とか全然しないし、琴子はすごいなってまた好きになった。」

「好き」って言葉にお母さんと弟たちが「ひゃー！」と声をあげ、わたしは顔を赤くした。家でまで勘弁してって、思っていたら。

「でも、こんなにいそがしかったら、部活のことなんて考えられないと思う。」

思いがけず言えなかった気持ちを代弁されて顔が熱くなり、そしてお母さんはハッとした。

お母さんは動揺したようにわたしを見て、「ごめん」って謝ってきた。

「わたし……琴子がいつもすごくよくやってくれてるから、それがふつうになっちゃってた。がんばってくれてたんだよね。」「で、でも、お母さんも大変で、だから——。」

「琴子にお母さん、甘えちゃってたんだよ。部活とか同好会とか、やりたいことあるならガマンしなくていいから。家事が大変だったら、どうにかできるように一緒に考えよう。」

家の外まで藤白くんを見送って、「ありがとう」ってお礼を言うと、やわらかい笑顔でかえされた。

「琴子がうれしいと、おれもうれしい。だからよかった。」

藤白くん、すごくこまるけど。悪い人じゃないんだなって思った。

## ◆6. 動画同好会を作ろう！

#4/19 (水)

翌朝、登校すると藤白くんはすでに席についていた。「昨日、お母さんと話しあ  
いしたんだよ」と報告する。弟たちをあずけている学童を一時間延長してもら  
う、夕食は調理が簡単なミールキットを導入する、掃除は休みの日にみんな  
で協力してやる、などなど。まだ大変かもしれないけど、少しは時間ができ  
そう。

それから、歩とサキにも家の事情を話すことに。

「そういうことなら早く言えよ」と言う歩に、「聞きもしなかったくせに」と藤  
白くん。二人が仲よくなる気配はないけど、藤白くんも入るとのことで人数も  
そろい、同好会も設立できそう！

そうして放課後。申請書類も準備でき、顧問は水島先生がひきうけてくれる  
とのことでびっくり！ 放課後も先生と一緒にいられるなんてうれしすぎる……！

さっそく水島先生も呼んで、活動について話しあうことに。歌ってみた、チャ  
レンジ動画……など歩は案を書きだしていく。サキは「おまじないの紹介とか実証  
実験やってみたい」と提案。

「このあいだ雑誌で見たんだけどね、好きな人の机を人さし指で三回たたいて、そ

の指にキスすると両想いになれるんだって!」「それ、どうやってうまくいったか調べるんだよ。」

すると、席を立った藤白くんが、わたしの机を人さし指で三回たたくおまじないをいはじめた。

「これでおれが琴子と両想いになったら、成功ってことでいい?」「成功しないからね?」

なんて、わいわいしていたら。水島先生がちょっと申しわけなさそうに、「じつは……」と話した。

☆☆☆

#4/20 (木)

翌日の放課後、わたしたちは学校で動画を撮影することに。教頭先生が同好会の設立をみとめる条件の一つが、学校のウェブサイトに掲載する動画を撮ることだったのだ。歩はすごい動画を作ってみとめさせると息巻いていて機材を持参、一方の藤白くんはわたしと一緒にならなんでもいいと投げやり。

まずは、学校の景色と校長先生のコメントを紹介する動画を作ってほしいという。手わけして素材を用意することになり、先生と歩とサキがビデオカメラを持って校長室へ、わたしと藤白くんで学校の景色をデジカメで撮ることに。それならと、ついでに学校案内をすることに。

といっても、わたしだって入学したての学校。見ているとあれこれ発見があって

おもしろい。そんな様子を藤白くんがまた「かわいい」って言うてくるので反応にこまる。学校案内とかどうでもよさそう。もっとわたし以外にも関心を持ってもらいたい。そもそも、藤白くんは本当にわたしが好きなのか。でもそんなこと自意識過剰みたいで聞けないし。

「琴子、何か悩んでる？」「藤白くんのことがよくわからなくて。」「おれも、琴子のこともっと知りたい。」

ダメだ、やっぱり話が通じない……。

藤白くんが撮った写真をみんなで見たら、ことごとくわたしが映りこんでた。

「おまえホント使えねーな！」との歩に、「編集でどうにでもなるし。琴子を撮らないとかムリ」と藤白くんは動じない。「コト、こいつどうにかしろ！」と歩に言われてしかたない、「同好会はみんなでやるんだから、決められたことはちゃんとやろうね」と伝えると、藤白くんはしゅんとしてうなずいた。わたしにだけすなおで、歩はまたキーツとなり、サキは笑っている。

明日は動画を編集することになったけど、水島先生のパソコンは古くて使えなそう。すると、藤白くんが「うちでやる？」と言ってきた。

**プロットの公開はここまで！ これが実際にはどうなったのか！？ 物語の続きが気になる人は1巻をチェックしてね～！**